夏目漱石と狩野亨吉

戸田民子

一

「夏目漱石と狩野亨吉」について論じるにあたって、先ず、狩野亨吉の略歴を瞥見しておきたい。と言うのは、慶応元年（一八六五）七月二十八日、佐竹藩（秋田県）、狩野良知の次男として生まれた亨吉が、世間に余り知られていないことを危惧してのことである。

昭和十七年（一九四二）十二月二十三日の東京・大阪『朝日新聞』朝刊には、

狩野亨吉博士　文学博士　狩野亨吉翁は、胃潰瘍のため、二十二日午前十一時東京小石川区大塚坂下町五五の自宅で死去した、享年七十八告別式は二十四日午前十一時から十一時半まで青山斎場で神式により執行される、翁は秋田県の出身、永らく一高校長として令名を謳はれ、のち京都の文科大学学長となつたが、近年は引退して悠々自適してゐた、生涯を独身で過し遺族は実姉前小屋ひさ刀自（八四）がたゞ一人である。

と、亨吉の死去を報じているが、この僅か16行の記事に、数ヵ所の誤りがあり、[1]更にその死亡記事に掲げられた写真が、[2]亨吉のそれではなかったという、まことに念の入った間違いようであった。

明治末年に第一線を退き、世間から忘却せられて亡くなった亨吉のこと故、その後の批評家たちが彼についてふれるに際しては、必ずと言ってよいほど、その冒頭に「本誌の読者諸君は狩野亨吉先生といっても、おそらくいままでにほとんどなに一つ聞かれる機会がなかったためにケゲンな顔をされるかもしれない」[3]というような前置きが述べられている。そのことは、没後三十五年を経た今日も、なお同様の事態が続いているわけであるが、それは偏に亨吉の学者としての業績に起因しているように思われる。

今日、亨吉の著書として残っているのは、没後、安倍能成によって編集された『狩野亨吉遺文集』（昭33・11　岩波書店）一冊で、同集に収録された左の七篇の文章（うち談話一篇）を挙げることができるばかりである。

①「志筑忠雄の星気説」（明28・6『東洋学芸雑誌』一六五号）

②「安藤昌益と其著書自然真営道」（昭5・5『世界思潮』三）
③「天津教古文書の批判」（昭11・6『思想』）
④「歴史の概念」（昭21・8『丁酉倫理』）
⑤「記憶すべき関流の数学家」（明40・12・5　東京数学物理学会主催　関孝和二百年忌記念講演会）
⑥「科学的の意義」（昭5・9・29　第九十一回茶話会に於ける講演補筆筆記）
⑦「修善寺漱石詩碑碑陰に記せる文」（昭8・4）及び「漱石と自分」（昭10・12・8　東京朝日新聞　談話）

しかし、これらの論文及びエッセイは、亨吉の専門とした哲学とは、あまりかかわりをもたぬものが殆んどである。では、なにゆえに専門分野の論文がないのであろうか。亨吉は、常日頃より自分の書いたものが没後まで残るのはイヤだと主張していたといわれ、[4]その主義を貫徹したと考えざるを得ない。このような事情からすれば、遺文集にある七篇の文章は、そうした彼の生き方を、一旦中断させてまで書かせたもの、あるいは書かずにはおれなかったものと考えることもできる。したがって、たとえ専門的論文ではなくとも、亨吉の主張の一端をうかがう上に、十分意味があると思われる。

さて、一般に余り知られていない亨吉の名前が、世間にクローズアップされるのはどういう時かというと、江戸中期の社会思想家、安藤昌益の紹介者として、あるいは漱石の友人として、あるいはその数少ない職歴の中で比較的長く在職した第一高等学校校長時代（明治三十一年～明治三十九年）の教え子たちによる『向陵誌』（一高回想録）に収録された逸話に登場する場合などである。単行本の形でなされた亨吉の伝記・研究は、管見によれば、「狩野亨吉の研究」（鈴木正　昭45・3　ミネルヴァ書房）と「狩野亨吉の生涯」（青江舜二郎　昭49・11　明治書院）の二冊を数えるのみで、しかも前者はどういった理由からか、発行後十日で絶版となり、今日もはや我々の目にはふれることができない。

そして今、筆者が述べようとしている漱石との関係においても、正面から取り組んで論じたものは、きわめて少ないというのが現状である。しかも、それらは久野収・八田三喜・小林勇・森銑三・青江舜二郎など、いずれも亨吉の側から見ている人達の論が殆んどで、漱石の側からのそれは僅かである。

二

漱石と亨吉との交友が、いつどのような機会に始まったかは明らかでない。が、二人に関しての、そう多くもない資料を基に考えると、次のような推測が成立ってくる。

明治十二年（一八七九）三月、漱石が東京府第一中学校の正則科に入学した時、亨吉は既に同中学同科に在学していたが、「しかしその頃は無論お互に知らずに過ごし」（漱石と自分）た。

明治二十一年（一八八八）七月、東京帝国大学理科大学数学科を卒業した亨吉は、翌年九月、同大学文科大学哲学科に入学、二十四年七月卒業後、二十五年（一八九二）七月に第四高等中学校教授

（二十六年一月校長事務取り扱いとなる）として、金沢へ赴任するまで同大学院哲学科に籍をおいていた。

さて、この二十五年は、漱石が同大学英文科三年の年である。この年の七月、哲学科では、藤代素人の「夏目君の片鱗」によれば、「少し世間向の材料を加へようと云ふ方針」[5]を打ち出し、従来、同科のみで編集してきた『哲学会雑誌』を、『哲学雑誌』と改め、同科以外の文学諸科学生にも参加を呼びかけ、漱石は、独文科の藤代貞輔（素人）らと共に委員に選ばれた。『哲学雑誌』ということからみると、この時に漱石と亨吉との接点が生じたわけであるが、前述のように、七月には亨吉は金沢へ赴任している。しかし、今日とちがって、きわめて学生数の少なかった、しかも人気の低い文科であってみれば、学科は異なってもまるで一面識もないというような関係ではなかったのではなかろうか。更に、漱石は同年五月の『哲学会雑誌』に翻訳「催眠術」（Ernest Hart）を発表しているわけだが、この著は当然亨吉の目に触れた筈である。[6]が、この段階ではまだ交友関係が成立していたと断定することはむずかしい。

亨吉は、その想い出「夏目君と私」[7]の中に、「夏目君と私と相識つたのは、夏目君が松山へ赴任される少し以前で、山川信次郎君を介してであつた」と述べている。「少し以前」とはどの程度の年月を指すのか、甚だ不確かなことではあるが、漱石の松山赴任は明治二十八年（一八九五）四月である。しかし、二人の出会いはもう少し早いようである。

漱石全集に収められた、亨吉宛の書簡は七十余通あるが、最も古いものは明治二十六年（一八九三）十月二十七日付で、亨吉の名前が初めて出るのはそれより早く、同年八月十五日付、立花銑三郎（当時哲学科二年で、亨吉より一級下、『哲学雑誌』編集委員の一人）宛で、「狩野君は高中の教師探索の為め未だ帰沢の途につかず過日来小生も段々同氏の説諭にあづかり是非奮発の上赴任してくれろと依託被致候へども未だ諾否の返答は不仕候」と見ることができる。そして、菅虎雄の「学生時代」によると、明治二十六年の夏休み頃に菅は、立花銑三郎・太田達人・米山保三郎・藤代素人・狩野亨吉らと「紀元会といふものを起し」[8]たとのことであり、漱石もその一員として参加している。

この「紀元会」について従来注目する向は少ないようであるが、筆者は、作家漱石の思想形成に、多大の影響を与えたグループであるように思う。

漱石没後、その人間像についての逸話が各方面からさまざまな形で発表された。とりわけ、所謂漱石山脈と呼ばれる系列に入っていた人達のそれが、大きな発言力をもち、また多数が紹介されたことは周知の通りである。そうした中にあって、沈黙に近いほどの寡黙を守った人たちの一団があった。すなわち右の「紀元会」を中心とする学生時代の友人たちであった。しかもこの人達は、作家以前の漱石を、あるいは青春時代の人間夏目金之助を間近に見てきた人たちである。

漱石の学生時代の友人グループとは異なり、漱石山脈に連なる

人達は、なんらかの形で文筆業に携わる人々が多かった。それ故に、漱石に関する逸話を文献的資料として数多く残すことができたのであろう。しかし、「紀元会」を中心とした友人グループの寡黙は、どうもお互いが、示し合わせて黙して語らずの態度をとっていたと思われる節がある。たとえば大塚保治は「学生時代」(9)(談話)の中で、

菅虎雄君とか、同級だつた狩野亨吉君なぞの方が詳しく知つてゐる筈(中略)色々な俗事で相往来もしたが、余りに私人的な事情で発表の限りではない。(傍点筆者)

と述べ、藤代素人は

夏目君の話は大分新聞にも出たから、更に珍らしい種子を追加することも出来ぬ。(傍点筆者)

と「夏目君の片鱗」で述べている。更に、今もって大きな謎とされたままになっている、明治二十七年(一八九四)の秋の、漱石の行方不明事件について亨吉は、

菅君を驚かすやうなことがあつたのだが、それは菅君が一番詳しく知つてゐる事で、自分が語るべきではない。(傍点筆者)

と「漱石と自分」の中で述べているが、菅はついにこのことについては公表しなかった。この件のみならず、菅虎雄は作家以前の漱石が人生の岐路に立った時、いつもその側にあって、その間の事情については熟知していた筈であろうと思われるにもかかわらず、多くを語らなかった。

門下生の漱石への思慕の情が強烈であればあるほど、その軽さが目立ち、逆に亨吉らの友人グループの沈黙がまた万金の重みをもって我々に語りかけてくるものがある、とみるのは筆者一人であろうか。

漱石の書簡集を見ていると、明治二十二年(一八八九)から二十五年(一八九二)頃までは、その交友関係が、正岡子規(一八六七―一九〇二)に集中していたにもかかわらず、二十六年あたりからは、序々にではあるが、「紀元会」のメンバーを中心にその交際範囲は広がりを見せ、その中でもとりわけ、以前の子規の場と同じ位置を占めるほどの関係が、亨吉との間に始まるのである。

情念の人正岡子規との交友関係が、漱石にどのような影響を与えたかについては別に詳述したので(10)、ここでは重複を避け、科学的思想家狩野亨吉との関係に限定して考察したい。

三

狩野さんから手紙が来た。そこで何の用事かと思つて開いて見たら用事ではなくて只の通信であつた。夫で僕は驚ろいた。僕は狩野さんと云ふ人は用事がなければ手紙をかく人ではない。しかも其手紙たるや官庁の通牒的なものに限ると思つて居たのだから驚ろいた。此手紙は僕のかきさうな手紙で毫も用事がないから不思議なものだと思つた。(中略)何でも君が僕の夢を見た事がある。さうして僕が養母と其娘と居て穴八幡があつて、養母の名が仲であるといふ夢は実際妙である。ことに日本新聞にあんな事が出たのを知らないで見たのだから愈妙だ。(傍点

筆者）

右は、漱石が、明治三十九年（一九〇六）十月二十三日付で、当時京都帝国大学初代文科大学長であった亨吉宛に送った書簡の冒頭部分である。

この日漱石は、亨吉から「用事」もないのに「僕の書きさうな」「文学的」な手紙を受けとり、「甚だ嬉し」く思い、実に長文の、しかもこの時期――いうまでもないが、教師をやめて、朝日新聞に入社する半年前である――の漱石を理解するのに最も重要と思われる心情及び思考表現のある返書を、昼と夕方の二回に分けて書いている。

第一便には、前述のように思いがけない亨吉からの手紙に感激し、素直にその喜びを述べ、亨吉のいる京都へ行ってみたい。しかし「安閑」とした暮らしをするためにではない。「僕は世の中を一大修羅場と心得てゐる。さうして其内に立つて花々しく打死をするか敵を降参させるかどつちにかして見たい」ため、更には「どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となつて、未来の青年の肉や血となつて生存し得るかをためして見たい」、そして、その「仕事をやる骨休めの為め」に京都へ行きたいと書いた。

同日の夕方の第二便は「こんな手紙はカキ懸けた時書いて仕舞はないと滅多にかけるものではない。又かゝうと云つて滅多な人にかけるものではない」という文章で始まり、大いに将来を嘱望されていた自分が、突然松山へ都落ちした十年前の心情及び思考と、十年後の今日のそれとが、どれほど違ってきたかを、

然し今の僕は松山へ行つた時の僕ではない。どんな事があらうとも十年前の事実は繰り返すまい。今迄は己れの如何に偉大なるかを試す機会がなかつた。己れを信頼した事が一度もなかつた。朋友の同情とか目上の御情とか、近所近辺の好意とかを頼りにして生活しやうとのみ生活してゐた。是からはそんなものは決してあてにしない。余は余一人で行く所迄行つて、行き尽いた所で斃れるのである。それでなくては真に生活の意味がわからない。手応がない。（中略）天授の生命をある丈利用して自己の正義と思ふ所に一歩でも進まねば天意を空ふする訳である。

と、縷縷詳述している。

四

残念なことには、亨吉の漱石宛の書簡を見ることができない[11]ために、事務的書簡しか書かなかったという亨吉が、果たしてどのような手紙を送ったのか推測の域を出ないわけであるが、漱石をしてこれほどまでに感激させた契機となった夢の話について少し考えておきたい。

漱石の言によれば、亨吉は、漱石と養母の夢を見た位では決して手紙なんぞ書く人物ではないという。ただしかし、自分の見た夢の後で、『日本』新聞の記事を見て、そのあまりの不可思議な偶然の一致に筆をとったとある。では、その『日本』新聞の記事

とはどのようなものであったのだろうか。

明治三十九年十月十七日（水）の『日本』新聞の第六面に、〈○文界風の便り〉と題して、漱石が「廿幾年振か」で養母及びその娘と再会し、「漱石も大に喜んで金品を母子に与へて帰へしたのは遂此の頃の事、其後も度々母子を訪ふては其寂寥を慰めて居るとのことだ」という記事がある。

「草枕」（明39・9　新小説）でその名声が一躍あがった漱石にとって、右の新聞記事は有名税的意味あいをもったゴシップ記事であった。すなわち、『日本』新聞には養母と漱石が「大に喜んで」再会したとあるが、漱石の唯一の自伝的作品といわれる「道草」（大4・6・3～9・14　東京・大阪朝日新聞）、あるいは当時の日記及び断片を見ても、あるいは鏡子夫人の『漱石の思ひ出』（昭3・11　改造社）を見ても、そのような事実を指摘する資料はみいだしがたい。したがって、新聞記事にあるような劇的対面をしたとはとても考えられないことである。

一方、このような漱石のゴシップ記事が出始めたのは、この年になってからのことである。そして、そうした新聞記事が出ると、漱石のもとへ、友人・弟子たちの好意(?)によって切り抜きが送られてきたようである。例えば明治三十九年二月十一日付の鈴木三重吉宛の書簡には、『人民新聞』に、「吾輩は猫である」（明38・1・1～明39・8・1　ホトトギス。以下「猫」と略記）を「作つて以来細君と仲が悪るくなつたとあるそうだ」と書いているし、また同年八月十二日付の深田康算宛には、「都新聞のきりぬきわざ〳〵御送被下難有存候」と書いて、市電運賃値上げ反対デモに漱石が参加したというその記事についての意見を述べ、更に同年同月二十六日付の小宮豊隆宛に「大阪ノ滑稽新聞所載の写し。学生がキリヌキを送つてくれた」と記し、記載された肖像の模写を送っている。

いずれにしても全て他愛のない風聞記事の域を出ていないし、漱石自身もその記事と釣合うように「新聞位に何が出ても驚ろく事無之候」（既出の深田康算宛書簡）と、軽くいなしている。しかし、その内容においては、同程度の意味しかもたない先の亨吉紹介の『日本』新聞記事を契機とした漱石の興奮ぶりは一体どういうことなのであろうか。一顧してみる必要がありそうである。

漱石が、この日亨吉にこれほどの長文を書く動機となったのは、文面から察すると、夢の話しを云々するのが目的でなくて、「万古不易と云ふべき代物ダ」（明36・7・2付　菅虎雄宛）、「狩野のいふ事だから間違はない」（明39・1・31付　菅虎雄宛）、「あれは学長なれども学長や教授や博士抔よりも種類の違ふたエライ人に候、あの人に逢ふために候、わざ〳〵京へ参り候」（明40・3・23付　野上豊一郎宛）のように、畏敬してやまなかった先輩亨吉からの、プライベイトな手紙に触発されて、ペンをもったと考えるのが穏当であると思われる。その意味で、「急に親しみを感じさせられ」[12]て書いたと見る古川久の意見もまた穏当である。

しかし、ここで次のような疑問点が出てくるのである。すなわ

ち、「官庁の通牒的」書簡しか書かない亨吉が、なにゆえに筆をもったのか、また夢の話を亨吉がどのように見ていたのかについて、はたして漱石は理解し得ていたのであろうかという二点である。

先ず、前者については、「余つ程閑日月が出来たか然らずんば京都の空気を吸つて突然文学的になつた」からか、いずれにしても「狩野さんが僕の畠へ近付いて来たのだから」嬉しい、との反応を示し、後者については、「僕の様な人間は君程悟つてゐないから稍ともすると拘泥していけないが夢丈は自由自在で毫も自分に望も予期もないから甚だ愉快だ」と述べ、後年「夢十夜」（明41・7・25～8・5　東京朝日新聞）の『第八夜』や、「三四郎」（明41・9・1～12・29　東京・大阪朝日新聞）の中で広田先生が見た夢（後述）を書いた時の漱石とは比較にならないほどの余裕ぶりをみせているのは注目する必要がありそうである。そして、この時点での漱石は、「夢」を云々するよりも自分の心境を語る方に心をうばわれているように思われる。

もっとも、漱石のみならず、人間通有の心理として、思いがけない人物から「嬉しい」便りを手にした時、ことにその時期が自己にとって余裕のある時期であるならば問題はないが、その反対に鬱屈している場合、そうした書簡は一服の清涼剤の範囲を超えて、まさに邂逅ともいうべきドラマチックな存在になる筈である。そして手紙をくれた相手の真意を慮ることよりも、自己表現の噴出の糸口をつかんだものとしてのエゴイズムに陥るのもやむを得ないことかもしれない。この頃以後の漱石と亨吉との交友関係について、青江舜二郎は、

それ以後の漱石の亨吉宛の手紙にははっきりそれまでのへだたりがとりのぞかれている。意地の悪い見方をすれば、朝日新聞に入社して日本一流の、しかももっとも人気のある作家にのし上がるにつれ、明治四十一年、〃病気退官〃後、まるでひどい生活に落ちこんでいった亨吉にいつかさげすみに似たものさえ感じはしなかったか。（中略）漱石にはもともとそうした軽薄さがまったくなかったとは言い切れまい。(13)

と、辛辣な意見を述べているが、果たしてそのように考え得るのだろうか。

漱石の亨吉宛の書簡は、前述のように明治二十六年十月二十七日から大正二年十一月十二日までの間に、七十余通を見ることができる。が、その内容は必ずしも用件のみを記したもののみではなく（大部分はそうだが）、中にはこの日と同じく胸襟を開いた姿勢を見せているものが他にも指摘することが可能である。

例えば、留学先から亨吉・大塚保治・菅虎雄・山川信次郎の四人に連名であてたロンドン便り（明34・2・9付）、あるいはそれ以前では、松山からあてた書簡（明28・5・10付）で、その内容は、当時亨吉とほぼ同じく郵便の回数を重ねた正岡子規宛のものと一致（松山における不満の記述）しているのを見ても、漱石の亨吉への傾倒ぶりを窺うことができよう。

ただそうした漱石の胸襟を開いた姿勢に、まるで反応を示さな

かったと思われる亨吉が、ようやくのこと、初めて積極的行動をとったがために、漱石がはしゃいだのである。こうした二人の間にある右のような経過を知らずに、手紙のみで判断したがために、青江にはそれが漱石の「軽薄」と見えたのであろう。

五

明治四十五年（一九〇七）三月二十八日から四月十一日にかけて漱石は、京都・大阪に滞在した。この関西行きの公的主目的が何であったかについては、以下の事情から理解が可能である。すなわち、この年の春漱石は「大学も高等学校もやめ」て、「新聞屋（朝日新聞社　筆者註）に相成」（明40・3・22付　亨吉宛）ることを決心した。この朝日新聞社への入社に際し、漱石と直接的交渉を行ったのは、五高時代の教え子の坂元雪鳥（白仁三郎）であるが、「朝日」招聘の発議を行い、尽力を見せたのは「大阪朝日新聞」の主筆をつとめていた鳥居素川であった。こうしたことから、漱石は入社の決心をしたのを契機に、大阪の社屋にこの素川を始め、主たる人々への挨拶のため関西入りをした。

一方、私的主目的が何であったかについては、以下の理由から判断ができる。すなわち「京都には狩野といふ友人有之候。（中略）あの人に逢ふために候。わざ〳〵京へ参り候」（明40・3・23付　野上豊一郎宛）からも頷けるように、亨吉に会うための関西行であったことがわかる。年来の友人である亨吉は、当時丁度、京都帝国大学文科大学長として、下鴨糺の森に居を構えていて、漱石は京都滞在中ここに宿泊した。

この公私の目的を果たしおえた後、漱石は「入社の辞」（明40・5・3『朝日新聞』）と、「京に着ける夕」（明40・4・9～11『大阪朝日新聞』）によって、自己の位置についての公的発言と、私的な旅の印象記をそれぞれ著わした。

さて、ここで筆者は漱石の作品の中から、明らかに亨吉と判断できる人物が登場する作品を通して、漱石と亨吉とのかかわりあいを見ていきたいと考えるのである。しかし、漱石の作品の中に、それと覚しきものは、右に挙げた小品「京に着ける夕」一篇があるのみである。しかも、この小品を読んでいくうちに、我々は、その主題が亨吉と漱石とのことを、あるいは亨吉自身のことを述べるという点にあるのではないことに気付かされる。我々は、この時期から「十五六年の昔」に、子規と一緒に京都へやってきた漱石が、その折の思い出を多分に感傷的気分にひたって、追憶の世界に逍遙しながらこの小品を書いたであろうことを感得させられるのである。しかし、子規と亨吉が、漱石の中で大きな位置を占めていたことは既に本稿第二章の後半で述べた通りである。その意味で、亨吉の宿で、子規を追想している漱石の胸中には、ただ単に子規を追悼する感慨のみが去来していたわけではなかった筈である。このように、この小品からは「筈である」との推測ができる程度で、具体的に、漱石の京都滞在中での亨吉とのかかわりあいを指摘することはできない。亨吉も、この間のできごとに対しては「京都へ来られた時には、しばらく私の家に滞在して」

（「夏目君と私」）いたと語るのみで、この時期の二人の接点を考察する手がかりとなる資料は、現在のところ管見にはふれない。

そこで、「京に着ける夕」以外の作品の中で、亨吉を彷彿させるもの――所謂モデル論――が他にないかを見ていきたい。

六

亨吉は、「漱石と自分」の中で、「（友人が）『猫』の中にお前のことが書いてあると注意してくれたので、さうか自分のことが書いてあるなら見やうと、読んで見たが自分のことが書いてあつたかどうか記憶して居らぬ」（傍点筆者）と述べている。

この「お前のこと」とは、具体的には一体亨吉のどのようなことを指して言ったものであろうか。亨吉の四高時代の教え子である八田三喜は「狩野亨吉先生」の中で

原坦山が惑病同原論を著はしたとき、先生に其の批評を請うたら、先生は一面の真理があるとて、先生の病は祖先か自分かの罪悪の結果であるとの疾病観を話された。之は有名な話で漱石も小説に採上げた筈だつた。[14]（傍点筆者）

ということを述べている。このことから「お前のこと」とは亨吉の「疾病観」であることがわかる。そしてこの「疾病観」が、「猫」の中でどのように使われているかというと、第二章に、

先達て其友人で某といふ学者が尋ねて来て、一種の見地から、凡ての病気は父祖の罪悪と自己の罪悪の結果に外ならないと云ふ議論をした。大分研究したものと見えて、条理が明晰で秩序が整然として立派な説であつた。（傍点筆者）

と述べられていて、亨吉の言葉も、かなり正確に引用せられていることがわかる。そしてこの「友人で某」は、第八章で哲学者として再登場するが、「珍客」とのみ表現され、伏線がひかれ、名前はまだ紹介されない。第九章に至ってようやくこの某は、「八木独仙」という名前であることが判明する。

この「友人で某」の八木独仙は、なぜ苦沙弥に対して右のような「疾病観」を述べたのであろうか。

苦沙弥は「胃弱」（一）のため、たえず胃痛に苦しめられている男である。猫や妻君や迷亭たちは、この「胃弱」を「神経胃弱」（一）と判断し、きわめてつれない態度で苦沙弥と接するのである。この所謂神経性胃炎には、心の平静を欠くことが、一番の障害になるわけだが、苦沙弥にはたえず「落雲館事件を始めとして、今戸焼の狸から、ぴん助、きしやご其ほかあらゆる不平」（八）不満で心が占領され、ついには、「夢に迄肝癪を起」（八）す程になってきた。この苦沙弥の苦痛を初めて真正面から受けとめてくれたのが八木独仙なのである。独仙は苦沙弥に「ぴん助やきしやごが何を云つたつて知らん顔をして居ればいゝぢやないか。どうせ下らんのだから（中略）人が気に喰はん、喧嘩をする、先方が閉口しない、法廷へ訴へる、法廷で勝つ、夫で落着と思ふのは間違さ。心の落着は死ぬ迄焦つたつて片付く事があるものか（中略）山があつて隣国へ行かれなければ、山を崩すと云ふ考を起す代りに、隣国へ行かんでも困らないと云ふ工夫をする。山を越さなくとも満

足だと云ふ心持を養成するのだ」（八）と述べ、「消極的の修養で安心を得ろ」（八）と説教をする。

この「消極的の修養で安心を得ろ」という論法は、亨吉が常に「くりかえし述べ」[15]ていたという安藤昌益の「我道には争ひなし。我は兵を語らず。我戦はず」[16]という言葉から窺うことのできる消極的生き方と同じ意味内容をもったものとして亨吉と独仙の説との間に共通点を指摘することができる。

そして右の独仙の説は、迷亭によれば「十年前学校に居た時分と今日と少しも変りやしない」（九）ということである。

「猫」の執筆時期から、溯ること十年前が漱石にとってどのような年であったかをみてみよう。それは明治二十八年のことである。伝記上の事項的説明をするならば、その年の四月に漱石は、四国の松山中学へ赴任していった。この所謂都落ちともみえる松山行きについて漱石は、当時を回想して、その時の心境を、亨吉に

余は比較的ハームレスな男である。進んで人と争うを好まねばこそ退いて一人（中略）退いて只一人安きを得ればよいと云ふ謙遜な態度で東京をすてたのである。（明39・10・23付書簡、傍点筆者）

と述べている。迷亭が証言しているように、独仙が十年一日の如く消極的生き方を主張していたように、亨吉も又十年前に、既にこの説を唱えていたのである。そのことは右の亨吉宛の書簡の傍点箇処に明らかである。そして、この亨吉の主張が、当時はもとより十年後の今もなお漱石の脳裏に大きな比重を占めていたことは、右の手紙が亨吉のその説を中心に展開していることでも頷ける。そのことを説明するために今少し右の手紙の内容を検討してみよう。

十年前、亨吉の説に共鳴して松山へ落ちていった漱石は、日ならずしてこの消極的生き方に後悔の念を抱いたのである。「当地下等民のろまの癖に狡猾に御座候」（明38・5・10付）と亨吉に書き送った松山のくらしは「文明の衣をつけた野蛮人」が「社会の悪徳を増長」（明39・10・23付　亨吉宛）させるためだけに生きているような不愉快なものであった。そして十年後漱石は「今の僕は松山へ行つた時の僕ではない。（中略）余は余一人で行く所迄行つて、行き尽いた所で斃れるのである」と所謂私の個人主義宣言を行ったのである。

ところが、その生き方を実践に移した途端に漱石は神経衰弱に陥ってしまった。この間の事情については『漱石の思ひ出』、「道草」に詳述がなされている。更にその鬱屈した精神のはけ口として書かれた要素の色濃いこの「猫」で、又々この人間の生き方についての消極論に焦点が合わされ、そこに亨吉がモデルではあるまいかと覚しき人物―八木独仙―が登場してくるのは、大きな意味をもつものと云えよう。

従来の「猫」に対する評価は、処女作であるという意味での注目はされていても、大方の評は、戯作の域を出ない習作的作品であるとの見方が強い。しかし、作家の処女作というものは、後の

作品への志向性を見せるものである、という意味で重視せねばならないことは周知の通りである。この意味で、心の平安を失った苦沙弥が独仙に、自己の内面的苦悩を語りかけるパターン、つまり、主人公（？）が心の平安を失った時、誰かに自己の内面的苦悩を告白するというような設定が、その後の漱石の作品の多くに継承されていることに気付くであろう。

ただ、ここで一点注意しなければならないことがある。それは、「猫」の独仙が、苦沙弥の目にどのように影じていたかという点である。苦沙弥は独仙のことを常に「超然として出世間的」であり「神経衰弱以前」（十一）の人間として羨望の眼をむけている。しかし実際の独仙はどのような人間であったのであろうか。苦沙弥の見た通りの独仙であったのであろうか。

さすがに呑気の連中も少しく興が尽きたと見えて、「大分遅くなった。もう帰らうか」と先づ独仙君が立ち上がる。（中略）寄席がはねたあとの様に座敷は淋しくなった。（中略）呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟った様でも独仙君の足は矢張り地面の外は踏まぬ（十一）

これは「猫」の最終章の最後に、猫の長い独白場面があるが、その冒頭である。「悟った様でも独仙君の足は矢張り地面の外は踏まぬ」に見られるように、現世に生きる以上は凡て所謂火宅の人であることを、漱石は猫の口を通して語らせている。独仙も勿論火宅の人である。そして自己の「心の底」にある「悲しい」人生を凝視して生きているのである。「消極的の修養で安心を得ろ」との説を会得するまでの独仙の心中に、どのような苦悩があったかを、苦沙弥は気付いていないのである。だから独仙のことを「神経衰弱以前」の「出世間的」人間と規定してはばからないのである。これは苦沙弥の人を見る目がないというよりは、それはむしろ苦沙弥の視野の狭さと、自己執着の強烈さを物語るものと考える方が穏当であろう。

そして、この苦沙弥の対独仙観は、本稿の第三章の冒頭に詳述した明治三十九年十月二十三日付の書簡に述べられていた「僕は狩野さんと云ふ人は用事がなければ手紙をかく人ではない」という文章等から窺うことができるように、少なくとも、亨吉から手紙をもらったであろうと思われる、十月二十三日以前の漱石の対亨吉観ででもあったということができる。

七

右のように「猫」の中に独仙という人物形象を介して、自己内部の亨吉とかかわる部分を漱石は表出したわけである。このような亨吉像の作品への投影は、この「猫」に限るのであろうか。もし、その後に受け継がれるとすれば、どのような形で作品の中に亨吉を、そして独仙の後身を投影あるいは継承させたのだろうか。結論を急ぐようではあるが、例えば「三四郎」（明41・9・1～12・29 東京・大阪朝日新聞）の広田先生にその分身を委ねたと言えよう。そして囚われ人苦沙弥の後身には、やはり囚われ人三四郎をもってきたと思われる。

漱石は、「三四郎」を執筆するのに先立って、鈴木三重吉に

君の手紙や小宮の手紙を小説（「三四郎」筆者註）のうちに使はうかと思ふ。近頃は大分ずるくなつて何ぞといふと手近なものを種にしやうと云ふ癖が出来た。（明41・7・30付　書簡）

と述べ、その取材方法の一端を述べている。この「三四郎」の素材についての所謂内輪話的裏話は、小宮豊隆が、「『三四郎』の材料」と題したエッセイの中に詳述している。[17] しかし管見によれば、従来三四郎・与次郎・野々宮・美禰子らについてのモデル論は数多く見ることができたが、広田先生についてのそれは、先に述べた小宮豊隆のものにあるように、時には「夏目漱石」自身であったりする、という程度のものが殆んどで、確かな典拠となるもので論じられたものはまだ見ない。

そこで筆者は、この章の初めに述べたように、苦沙弥の後身を広田先生に見出し、その広田先生の中に亨吉が、どのようなかかわりをもって書かれているかを見、更にそれを漱石がどのようにとらまえていたかを、以下みていきたいと考えている。

モデル論を展開していく場合、広田先生の風貌及び言動から、明らかにそれと判断できる亨吉との類似性を、個々に列挙し、実証していくことが順当であろうと思う。しかし、その一方では、そうした細部にわたる類似性の明示もさることながら、それ以上に巨視的立場から、この「三四郎」のテーマと直結する観点からの類似性から入っていくことの方が、より大事なのではないかとも考えられる。そこで筆者は後者の方法で論を進めていきたいと思う。

「三四郎」の主人公が誰であるかについては、一応の定説があり、ここでは論じることを控えるが、「偉大なる暗闇」[18]（六）である広田先生の位置も決して疎かにはできまい。

「田舎の高等学校を卒業して東京の大学に入った」三四郎は、東京の近代文明に、あるいはそこで生活する都会人の物の見方、考え方に触れるたびに、驚きの目をみはりながら「色々に動いて」[19]いく。そして里見美禰子という新しい時代の生んだ女性に淡い恋心を喚起させられる。ところが、この美禰子が一体自分のことをどのように考えているのかがつかめない三四郎は、序々にその内面に苦悩の色を濃くしていくことは周知の通りである。[20] そうして三四郎は、この苦悩が高まってくると広田先生の家を訪ねることを常とした。なぜ広田先生を訪ねるかについて三四郎は、次のように述べている。

此人の前に出ると呑気になる。世の中の競争が余り苦にならない。（中略）卅分程先生と相対してゐると心持が悠揚になる。女の一人や二人どうなつても構はないと思ふ。（七・傍点筆者）

すなわち、「世外」にあって「泰然と取り澄ましてゐる」（七）広田先生を時には「時代錯誤」（十一）だと思う三四郎だが、大方は「学者」であり「床し」（十二）い人と思い、「何うしたらあゝなるのだらう」（七）と思うのである。この三四郎の広田観は丁度、苦沙弥が独仙のことを「超然として出世間的」であり「神経衰弱以前」の人間であると定義づけていたのと相似した見方であり、

同時に明治三十九年十月二十三日以前の漱石の亨吉観にも相通じるものである。

しかし、「呑気と見える」（十一）独仙に「悲しい音」（十一）があったように、「暢気（のんき）」（七）な筈の広田先生にも過去があった。

三四郎はある日、いつものように広田先生を訪ねた時、彼から「二十年許前」（明治二十二年・憲法発布の年）に「たつた一遍逢つた女」に「夢の中で再会」した話しをきかされた。その女の面影が忘れられなくて「結婚なさらないんですか」と云う三四郎の問いに「結婚のしにくい事情を持つてゐる者」（十一）は、多くいるものだと説明した後、母親の存在が子供にとって非常に大きな位置を占めるものだと述べている。この二十年前の原体験が、広田先生の今日の生き方を見る時、大きな意味をもつことは当然のことである。そして亨吉と漱石にもこれと相似た原体験があったことを指摘することができる。

森銑三は『狩野亨吉先生』の中で

先生が若くて、金沢で教師をしてゐられた時、何か面倒な問題が起つたとかで、「その頃から僕は、頭が悪くなつてしまつた」と、平気でいはれた。[21]（傍点筆者）

と亨吉の思い出を述べている。亨吉が四高を退職した表向きの理由は「家事都合」（八田三喜「狩野亨吉先生」）であったが、真実は人事問題から生じた教師間のトラブルにいや気がさし、生来の消極的生き方を貫徹するための辞任であったことは、彼の日記（明27・3・21）、及び右の、八田三喜の文章に詳しい。しかし、森銑三のいう「面倒な問題」とは、彼の退職問題ではない。これは、同じく亨吉の日記に見ることのできる左記の

昨夜剛太郎、石井直、西田正の行跡につき憂苦すべきものあるを思ひ終夜眠安からず今日所労を勉めて出勤す。（中略）明日石井及西田に糾すところあらんとす（明27・1・31、傍点筆者）

という文章が、「面倒な問題」指摘の手がかりであることを教えてくれる。すなわち、西田正（西田幾多郎の姉で、当時婚家を離縁され、幾多郎の持ち家であった長町一番町の家に出戻っていて、亨吉はここに寄宿していた。）と、亨吉の甥の剛太郎と、教え子の石井直らの醜聞事件に亨吉がまきこまれたというのが「面倒な問題」の全容である。

この事件に対しての亨吉の見解をみようとする時、現在のところその資料となるのは、彼の日記が唯一の手がかりで、客観的資料の乏しいため、即断を下すことはむずかしい。教え子から「高潔で円満な徳操[22]」の師と仰がれた彼は、こうした西田正の行状を、ただひたすら嫌悪感をもって見ていたのであろうか。そしてついには彼の女性観を歪曲したものにし、このことが要因となって、亨吉は広田先生と同じく終生独身を徹したのであろうか。

たしかに八田三喜が言うように「高潔」で道義的倫理意識の判然としていた亨吉であったから、四高・一高・京都大学時代の殊に学生問題への対処の仕方には見るべき業績が多い。しかし、こと女性問題になると、本来もっている道義的倫理意識が、必ずといっていい程にその冴が鈍り、逡巡しているのは注目すべきこと

である。

亨吉の女性及び性に対する関心が非常に高かったことを暗示する資料として公的には安倍能成の

先生は人一倍人間の性欲現象に関心を持ち、先生の倫理学に於いて人間の性欲的エネルギーは重大な位置を占めて居ると聞いて居る。[23]

という一文がある。私的資料としては（その信憑性はともかくも）小林勇著「隠者の焔〈小説　狩野亨吉〉」（昭45・6『文藝春秋』特別号344～372頁）があり、更には亨吉自身の日記がある。但しこの所謂ポルノ日記は、亨吉の遺品が保管されている東京大学教養学部図書館から何者かによってもち去られ、今日もはや我々はその現物を見ることはできない。

さて、ここで問題になるのは、漱石が西田正に関する醜聞を、亨吉からきいていたかという点である。残念ながら、この是否を決定づけるに十分な資料は今のところ管見にはふれない。が、西田幾多郎に関する話題が出た折、正のことが又、話題に上ったと考えることはさしつかえがないであろう。漱石が、この時期に幾多郎のことを知っていたと証明するための資料としては、いずれも多分に推測の域を出ないものばかりではあるが、次の三例があげられる。

その一は、亨吉が住んでいた金沢市長町一番町が幾多郎の持ち家であったことは、其処へ手紙を出していた（明26・10・27付、明27・1・28付、明27・4・6付の計三通）ことから当然知っていたであろうと思われる。その二は、明治三十四年七月二十二日の漱石の日記に「金沢ノ西田ヨリ手紙」と述べてある。手紙の内容は定かでないが二人の間に何らかの接触があったであろうことを推測させる資料とはなる。その三は、北山正迪の次のことばに手がかりをみた。「円覚寺に漱石を紹介したのは菅虎雄である。菅虎雄は、北条時敬と同時期に今北洪川に参じてゐるから、北条時敬と関係の深い西田幾多郎は、漱石と全く無縁といふわけでもない」（「釈宗演と漱石」『禅文化』五十号）

第三点のみ菅からの接近方法であるが、菅も又亨吉の友人であり、しかも、四高を退職した後の亨吉は、頻繁に彼の所へ出入りしていたから、その折彼に西田正のことを話し、それを菅が漱石に語ったという推測も、あながちこじつけであるとばかりは言えないのではなかろうか。

一方、漱石の側では、本稿第二章後半に既述したように今日なお伝記研究の上で謎とされている時期がある。この明治二十七年秋の漱石の行方不明事件を逐一知っていたのは、菅虎雄と亨吉であったわけであるが、「菅君が一番詳しく知ってゐる事で、自分が語るべきではない」（『漱石と自分』）と述べた亨吉は勿論のこと菅もついに語らなかった。したがって、この事件については、従来漱石研究家達によって種々考察がなされたことは周知の通りである。そして、大方の見方が失恋のためにひきおこされた行方不明事件であると規定している。ただ失恋の相手が誰であったかについては異説が多い。しかし、この失恋は、漱石が「それから」

（明42・6・27～10・14　東京・大阪朝日新聞）以降の作品において、執拗なまでに追求してやまなかった所謂三角関係の原体験とでもいうべき意味内容をもった、不倫の結果の失恋であったのではなかろうかという説が専らで、今日その説がほぼ定着しつつあることも又周知の通りである。

八

こうして漱石と亨吉を見てきた時、筆者は、二人の青春時代に、後の彼等の女性観を考える時に、きわめて重要と考えられる暗い原体験を、共通してもったことを知らされた。

更に又、この二人は母親についても非常に似通った原体験を経験した。すなわち、二人は共に、所謂思春期と呼ばれる時期（漱石十五歳・亨吉十三歳の折）に母親を亡くしている。母親が、その生前に我が子をどれ程いとおしんだか、あるいは粗略にしたかには関係なく、一般論として人間は、子宮回帰的志向性をもっていると言われているのは周知の通りである。そして、この漱石と亨吉の二人は、一番その愛を必要とする時期に母親を亡くしているのであるから、一般人のそれと比較した時、かなり濃度の濃いものとしての女性（母性）への憧憬があったとみてさしつかえはないであろう。

ところが、この二人は共に自己の感情をストレートに表現することを否とする時代――殊に亨吉はその意識の最も強固な武士階級の出身であった――に養育されたから、そうした女性（母性）への思慕の情が、かなり屈折した形で表出されたであろうことも想像に難くない。そしてこれが広田先生の人物形象化に大きく影響したことも又想像に難くない。

以上述べてきたことから、次のようなことが云えるのではないだろうか。

漱石は、処女作の「猫」以来、常に自己の内面的葛藤を、主人公を通して見続けてきた人である。そして又、常に自己の原体験をフィクション化し、それによって自己の原体験を分析し続けた人である。ところが、実際に作品の中で自己の原体験を分析する段になると、彼の現実生活がそうであったように、主人公の理性と情念の平衡が崩壊するのである。こうした不安定な自己を書き続けていこうとする時、自分と同じ原体験をもつ亨吉は、正に鏡の中に写った自分の姿であったのではないだろうか。そして理性の人であるとばかり思っていた亨吉も又、時には自分と同じ情念の世界に逍遙することがあるのだ、ということを知った時の漱石のよろこびが、どれほど大きなものであったかは、繰り返し述べてきた明治三十九年十月二十三日付の書簡に詳しい。

ただしかし、鏡の中に写った自分の姿ではあったには相違ないが、亨吉の情念は理性で鎮められたが、漱石にはそれができなかった。このことは次の亨吉の漱石観によって十分頷くことが出来るのではないだろうか。すなわち、森銑三は

「漱石なんぞ、君、大したことはないよ」と事もなげにいは

れた。「まだまだ娑婆ッ気があつてね」といはれた。先生から見れば、漱石が社会といふものに拘束せられ、詰まらぬ問題にこだはつて、さうした世界から脱却しかねてゐたのがもどかしかつたのである。[24]

と述べ、亨吉自身も「漱石と自分」の中で、

この問題（博士号辞退問題　筆者註）なども夏目君自身恐らく後になつて考へたら馬鹿げたことをしたと思ひはせぬかとも考へられるが、その場ではさうもゆかなかつたらう。

と述べ、漱石の性癖の激しさをよく理解していた。

世間に向けて、自己表出することを極度におさえた亨吉には、その反動として厖大な量の日記が書き残されたことは既に述べた通りである。その一頁一頁に実に丹念に書き入れられた諸々のメモ及び文章をみていくと、漱石に優るとも劣らない程の自己執着を感得させられるのは筆者一人だけではない筈である。このように亨吉の内面にも又大きな問題が巣喰っていたことも確かではあるが、しかし、少なくとも亨吉には内面の感情表出に大きくブレーキをかけることのできる理性が強く働いた。のに比して漱石の場合はそれが非常に困難なことであった。ということは、漱石と亨吉の間には、内面に見ることのできる感情の激しさの持主であるという基本的な線上までの相似はあっても、外への出方が全く異っていたということである。そして漱石はそうした亨吉の生き方を尊敬し、自己の姿を亨吉に仮託する手法をとったのではないであろうか。その仮託された人が、「三四郎」では広田先生であり、そしてこの広田先生は後の「こゝろ」（大3・4・20～8・11東京・大阪朝日新聞）の先生に継承されていくのである。

（1）八田三喜の「狩野亨吉先生」（『科学史研究』第六号　昭18・6）、安倍能成編の「狩野亨吉遺文集」（昭33・11　岩波書店）の『年譜』及び『年譜附記』、更に、青江舜二郎の「狩野亨吉の生涯」（昭49・11　明治書院）を照合させてみると、次の通りの正誤結果を見ることが出来た。

①「自宅」とあるのは、八田・安倍・青江によれば「日大病院」で死去とのこと。②「二十四日午前十一時から十一時半」の告別式とあるのは、青江によれば、「二十五日の午前十時から十一時」とのこと。③「近年引退」とあるのは、八田・安倍・青江によれば「明治四十一年京大退官以後一切官職につかなかった」とのこと。④「悠々自適」とあるのは、八田・安倍・青江によれば「赤貧洗うが如しの状態であった」とのこと。⑤「ひさ刀自（八四）」は、青江によれば「久子刀自（八二）」とのこと。⑥「たゞ一人」とあるのは、安倍、青江によれば「養子剛太郎他多数」とのこと。

（2）写真が載ったのは東京朝日新聞のみで、大阪朝日新聞には載っていない。

（3）久野收「狩野亨吉　人と思想」（昭22・4『中央公論』四月号の68頁）

（4）○渡辺大濤「安藤昌益と自然真営道」（昭45・3　勁草書房）の『座談会　安藤昌益の研究者――狩野亨吉と渡辺大濤――』の398頁。○森銑三「明治人物夜話」（昭48・10　講談社）の『狩野亨吉先生』の228頁。

（5）岩波版昭和四十九年版『漱石全集』附録収載『月報』第五号　昭

3・7　3頁。

(6)　八田三喜の「狩野亨吉先生」の34頁に「科外講演で一度、催眠術に関する講義があった」との文がある。

(7)　(5)既出の『月報』第五号昭3・7の1頁。

(8)　『新小説』臨時号――文豪夏目漱石――大6・1の19頁。

(9)　(8)既出の『新小説』の15～16頁。

(10)　拙稿『女子大國文』45号―「草枕」の写実性―参照。

(11)　現在亨吉の遺品（文書の類）は、東京大学教養学部図書館に保管（日記の複写は日本近代文学館にもある）されている。亨吉は、たしかに公的には自分の書いたものを残すことを拒否したが、私的には厖大な量の日記及び雑文の類を残している。が、今日漱石に関するメモがある日記及び性に関する記述のある日記は既に誰かの手で持ち出されてしまって、現物を見ることはできない。したがって、明治三十九年十月の日記もなくなっており、亨吉の側からの手がかりは、今の所はない。

(12)　古川久「漱石の書簡」（昭45・11　東京堂出版132頁）

(13)　「狩野亨吉の生涯」の611頁。

(14)　『科学史研究』第六号の37頁。

(15)　久野收「狩野亨吉　人と思想」の72頁。

(16)　「安藤昌益」、『日本の名著』19、昭46・11　中央公論社刊。

(17)　岩波版昭和四十九年版『漱石全集』附録収載『月報』第八号　昭11・6　1～4頁。

(18)　亨吉を語る人も又彼のことを「偉大な暗闇」的形容をしている。例えば「隠栖の洪学・狩野亨吉」（土田恭示「風流政客譚」日本政経公論社）あるいは「隠者の焔」（本文四九頁既出）と。

(19)　「『三四郎』予告」（東京朝日新聞　明41・8・19）

(20)　拙稿『女子大國文』八十二号「『三四郎』試論―三四郎の「驚き」をめぐって―」昭52・12参照。

(21)　「明治人物夜話」の229頁。

(22)　八田三喜「狩野亨吉先生」の37頁。

(23)　「狩野亨吉遺文集」の『年譜附記』212頁。

(24)　森銑三「狩野亨吉先生」の230頁。

（とだ・たみこ　夙川学院短期大学助教授）